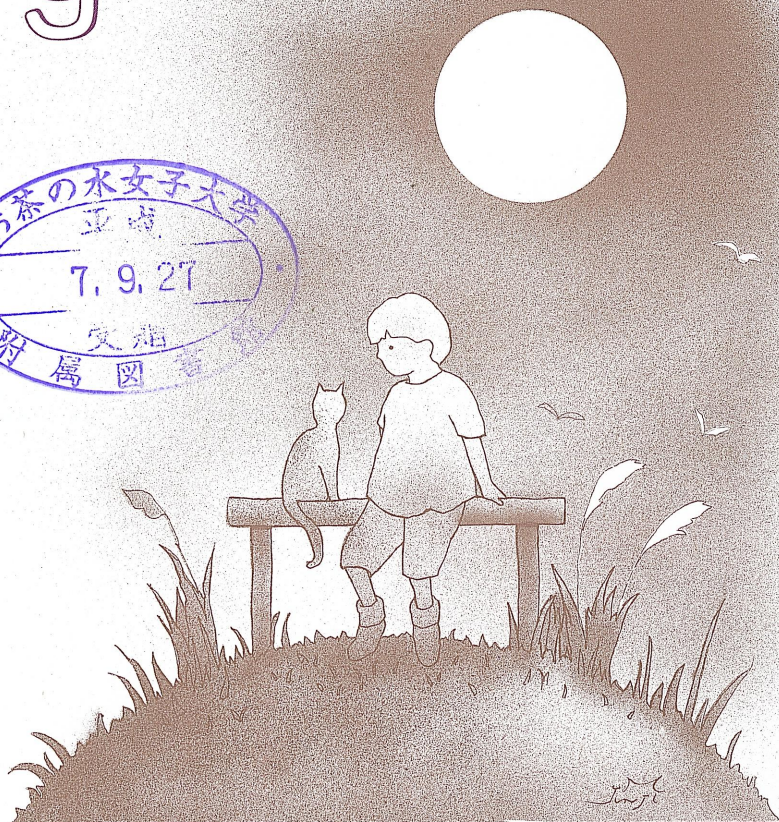
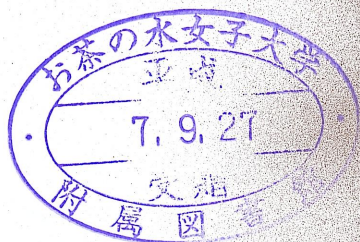


家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

1995

9



第94巻 第9号 日本幼稚園協会



## 子どもに生きた人 倉橋惣三

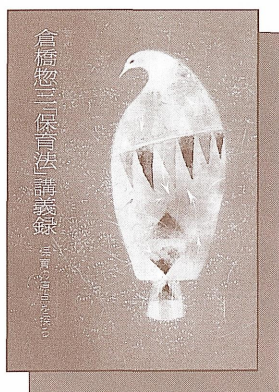
—その生涯・思想・保育・教育—

倉橋惣三の保育思想を、すべての著作物と周辺の人たちの証言によって説きあかし、これからの日本の保育の在り方を示す。

倉橋惣三研究の決定版。

森上史朗 著

A5判・492頁・定価3,800円(本体3,689円)



## 倉橋惣三「保育法」講義録

—保育の原点を探る—

昭和10年、倉橋惣三が最も円熟した時に行った保育法の講義録。

これからの子ども主体の保育への数々の提言がもりこまれています。

菊池ふじの 監修・土屋とく 編

B5判・256頁・定価1,500円(本体1,456円)



## 生活をつくる子どもたち

倉橋惣三理論再考

倉橋惣三実践園の保育を調査研究し、子どもの生活、発達、就学後の成績、母親へのアンケートなどから、この理論の重要性を改めて実証した労作。

飯島婦佐子 著

A5判・244頁・定価1,700円(本体1,650円)

キンダーブックの  
**フレール館**

# 幼児の教育

第94巻 第9号



幼児の教育 目次

——第九十四卷 第九号——

© 1995  
日本幼稚園協会

子供讃歌……………(4)

〈巻頭言〉人間主義の幼児教育……………河野 重男…(6)

不確かな未来を前に……………津守 真…(8)

震災後の子どもたち(1)

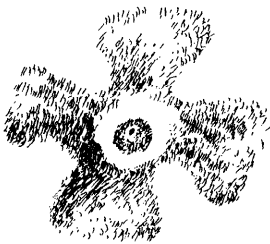
阪神大震災を体験した

子どもたちを見つめる中で考えること……………田代 和美…(12)

特集〈災害と子ども〉

淡路・阪神大震災——父の場合……………前田 陽子…(16)

思い出すこと……………清水 光子…(20)



災害と想像力 —— 「鯰絵」の向う側で —— ..... 森下みさ子 (24)  
戦争という「災害」 ..... 小川 剛 (28)

子どもに育てられる ..... 丹野 禧子 (31)

ある日の育児日記から (57) ..... 佐藤 和代 (37)

動物行動の研究から (3) 森は生きている ..... 小山 幸子 (38)

ここから先は子ども席 —— 近ごろ思うこと (1) ..... 永野むつみ (47)

マレーシアの子ども達をめぐって ..... 藤長かおる (56)

表紙・松永 潤二 / 扉題字・津守 真  
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・彌永たたえ

編集委員・田代 和美 / 本田 和子

榊田 正子・伊集院理子

編集部・仲 明子・大沢 啓子





# — 子 供 讚 歌 —

撮影・平野 清



## 人間主義の幼児教育

河野 重男

これからの幼児教育のあり方を「人間主義」という視点からとらえていくことが大切だと思う。

この観点から強調したいのは、「教育環境の人間化」ということである。

このことは、幼稚園教育要領の総則の冒頭において、高らかに謳いあげられている。

「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」

これがよく言われる「環境による教育」ということとであり、教育要領の哲学であり、理念なのである。そして、この「環境による教育」という主張は、先に臨時教育審議会が提唱した「教育環境の人間化」の主張と密接に関連している。

臨時教育審議会は、周知のように、その第一次答申（昭和六十年六月）において、教育改革の基本的考え方として、「個性重視の原則」を第一とする八項目を挙げ、その中で、「教育環境の人間化」を第五項目として謳い、次のように述べていた。



「今日、子どもたちにとって生活・教育環境が悪化している。学校においては、過熟した受験競争のなかで、児童・生徒の間、あるいは児童・生徒と教師の間に、心の触れ合いや人間的なつながり、友情、信頼が失われがちになっている。」

また、情報化など科学技術の進歩や都市化の進展により、子どもが家庭や地域社会で人間性豊かに育成されることが阻害され、自然のなかで相互に切磋琢磨する機会が失われている。

このため、学校の教育機能と家庭、地域の教育機能との相互の基本的在り方を問い直し、新しい家庭や地域の在り方を模索するとともに、教師ひとりひとりが子どもの心や体を理解するよう努めること、自然環境のなかで心身を鍛練できるような教育のシステムを導入すること、子どもを取り巻く学校や日常の様々な環境条件について、子どもの豊かな心を育て、たくましい体を作り上げるよう配慮することが重要である。」

このようにみえてくると、幼児教育の基本は「幼児と教師とが十分な信頼関係をもって共にかかわり合う環境づくり」に帰着することになる。いうまでもなく、この場合の幼児とは、それぞれに個性的な可能性をもつひとりひとりの子ども、という意味である。ここですぐに想起されるのが、「共感の心」とでも題すべき倉橋惣三の一文である。

廊下で

泣いている子がある

涙は拭いてやる

泣いてはいけないという

なぜ泣くのと尋ねる

弱虫ねえという

：随分いろいろのことはいいもし

してやりもするが

ただ一つしてやらないことがある

泣かずにいられない心もちへの共感である

(東京家政学院大学長)

# 不確かな未来を前に

津守 真

## 小石を並べる

五月の末、四歳のE子がブランコの足台の上に小石を積んでいた。ときどき庭の真ん中に歩いて行くが、また小石のところに戻ってくる。E子が去った間に、私は隣のブランコの上に同じように小石を一握り置いてみた。E子の小石は、下側が平らな石であることに私は気が付いていたので、似たような小石を拾ったつもりだったが、E子は私の石をひとつひとつひっくり返して見て、光った石や丸い石は捨て、下側が平らなただの石をひとつだけ取り上げて自分の石に加えた。私は、E子が以前にきれいな色のビー玉を並べるこ

に凝っていたことを思い出した。だれかがつまずいて崩すと激しく怒った。今回はただの石を一握り置いてあるように見えるが、E子の美的センスにしたがって秩序をつくっていることは明らかだった。

並べることは秩序をつくることである。手は放しても、その秩序を保つことにより、自分の手に持っているのと同じことになる。こういうのを見ると、秩序はたんに倫理社会的なことだけでなく、持つことと手放すこととの相互作用を調節する人間の自我が関与していることが分かる。

E子はそれから幼稚部の部屋に走って行ったが、小石の一握りを両手で持って行き、床の上にさっきと同じ様に並べた。移動する度に小石を持ち歩く。階段の途中に小石を並べ、自分は手摺りの上に腹はいになり立ったりして遊ぶが、かならずまた小石のところに戻ってくる。こうしてあちこちで遊びながら二階の戸外のベランダに出た。小石を手摺りのわきのコンクリートの上に並べた。そして最後に私と滑り台を滑りおりた。E子は帰る前にベランダに並べた小石を屋根の上に落としていった。手に持った小石を手放し、今日つくった秩序を一度こわして、新しい歩みに自分自身を開いて帰るこの子どもに、私は精神の健全さを感じた。

### 同じ場を一緒にたのしむ

いつも私を見ると抱っこをせがむY子は、この頃、私のそばを通り過ぎて、自分の足で

ホールを走ったり跳んだりすることが多い。足の不自由なY子が両足跳びでホールのはしまで跳び、音楽と一緒に走るのを見るのはうれしい。この日も、朝登校したY子は私のそばを通り過ぎて自分の部屋に入って行った。母がゴールデンウィークに泊まりがけで家族旅行に行ったときの写真を見せてくれた。子どもはこういうときの写真を大好きである。

Y子がそれを手に取って見ると、傍らにいたN子もそれを取って見たい。ふたりで何度も取り合いながら写真を見た。Y子が去るとN子も追っていく。こうして一日に何度も二人は一緒になった。偶然に鉢合わせして、抱きついたこともある。帰りがけ、Y子が少し早めに母親と門を出て行くと、N子もそれを追って門の外へ出たがった。何としてでも一緒に行こうという力強さだった。私はN子の手を引いて一緒に門の外に出た。バス停でY子とN子とベンチに座り、バスを待つ長い時間、ふたりで顔を見合せて笑った。

Y子にとって、いまや他の子どもは自分のしたいことを妨げたり、持っている物を取り上げる者ではなく、一緒に同じ場で親しむ存在になっている。

保育者はその日、その時に、子どもが必要に答えて動くうちに、子ども自身が変化をつくりだしていくことがよく分かる。

この文章が雑誌にのるときには、これまで何度も書いてきたOME P 世界大会は終わっている。私共はいまはまだ、世界大会の準備に格闘中である。大きな仕事を前にして、不確かなことや心配が一杯ある。財政、人数、講演者が来られなくなったとか、地震、円

高、予想しなかった事態も起こるだろう。そのときそのときの判断がそれで良かったのかどうか、迷いも多い。しかし、成否は別として、これだけ多くの日本の保育関係者達がO MEP世界大会のために、それが世界平和の一步であることを信じて、不確定な未来を前にして努力したことに意味があるのだと思う。

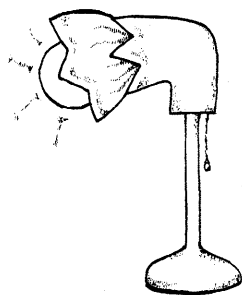
(愛育養護学校)



震災後の子どもたち (1)

阪神大震災を体験した

子どもたちを見つめる中で考えること



田代 和美

一九九五年一月十七日の未明に起こった阪神大震災では五千五百名以上の方々が亡くなられた。四か月以上たった現在もお、避難所で生活している人は三万人もいるという。どうしてこんなにも人間を大切にできない国なのだろう。ここには、生活しづらい人々にしわ寄せがいく日本という国の縮図が見える。基本的人権はどこにあるのだろうか。

地震が起こって以来、それをテレビ画面で見ているということの申し訳なさを背負って

きた。その画面にいるのが自分であってもひとつもおかしくはないのに、今自分はぬくぬくとしている。生はきわめて危うい偶然の上に成り立っていることを改めて感じ、そして、何に支えられて私たちは日々生きているのか、何が大切なのかを考えさせられ、突きつけられたようにも思う。こういうことを大人たちがきちんと考えてこなかったことが、今の子どもたちに様々なしわ寄せがいつている一因になっているようにも思う。

テレビ画面のこちら側にいた私共の周りの子どもたちも恐怖で泣き、また、親から離れられなくなったりもした。テレビ画面に映る被災地は、距離が分からない子どもたちにとって、自分のすぐ隣にあるような連続性をもって迫ってきた。自分の家のすぐ側に火の手が回ってきているかのように思い、大人以上にその場に居合わせているような感覚を持ち得ていたように思う。現実には体験した子どもたちの恐怖は計り知れない。

本誌は、この天災でもあり、人災でもある地震とどのようにかわっていくのか。活字という直接的な行動としては何等役にもたないものを通して、どうしようというのか。一月十七日以来、自分個人としての行動と共に本誌としてのかかわりを考え続けてきた。三月に神戸を訪れた。青いビニールシートがかかった家が目に入り始めてから、だんだんと倒壊した家が目だち始め、ついた先は瓦れきの山だった。自分が垂直に立っているのかどうか分からなくなるほど、建物も道路もゆがんでいた。壊れた建物の取り壊しがここかしこで行われ、街全体にアスベストが充満していた。避難所となっている学校では、吹き

さらしの廊下にも布団が敷かれていた。しかし、避難所の横には、外見はほとんど壊れていない家々が建っているところもあった。道路を一本隔てて倒壊した家とそのまま建っている家が並ぶという非情なコントラストを呈した光景があちらこちらにあった。この同じ地に住みながらも申し訳なさを背負って生活している人が大勢いるのだろう。その地に立って痛切に感じたことは、自分の行動とは逆に、当事者でない人間が少しでも当事者性を有するために機能するのは想像力だということだった。

避難所では、ボランティアの人々が疲れも見せずに働いていた。もちろん心の底に深い傷はあるだろうが、教育から離れたところで大人と共に働く子どもたちは明るく元気が良かった。子どもたちはボランティアにとっても周りの大人にとっても、救いだという話だった。教育とは何なのか、考え直すことを迫られているのではないだろうか。

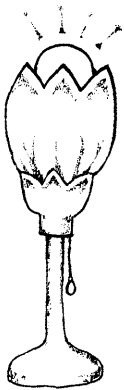
壊れた街を取り壊してより強い建物を建てるということでは、根本的に問題は解決しない。子どもたちにとってもこの震災はもちろん忘れたくとも忘れることもできないだろう。しかし、また単純に忘れてしまえばよいというものではないだろう。その直前まで幸せな夢を見ていたのだが、一瞬のうちに音をたてて崩れ落ちていく体験をした子どもたちは、どのように育っていくのだろうか。恐怖や悲しみや痛みが、いつかまとまった「過去」というものになり、その意味を理解していくことから生きていく力とそれを向ける方向性が引き出されていってほしい。そのためにはそれを共にする大人の存在が必要であ



り、おそらく長い時間も要する事であろう。多くの方々が子どもたちのために心を尽くしている。その方々の経験を少しでも私たちに分けてもらい、想像力を働かせながら子どもと共にある者の役割を一緒に考えつつ歩いていきたい。

そして、こんな時に不謹慎だと言われるかもしれない、が、子どもたちは人の命のはかなさと尊さ、そして、人間が助け合ってつながって生きていくこと、こうした現代の生活では実感を持ちにくいことを、まさに体で感じるといふ経験をもしたのではないだろうか。今回、多くの若者たちがボランティアという形で被災地へと向かっていったのも、そのような実感を求めていた側面もあるだろう。このことの示す意味は子どもたちにとっても大人にとっても大きい。この体験を忘れることなく、逆に積極的に意味づけながら大人も子どももこれから共に歩み行く方向を一緒に探していきたい。それは、被災した子どもたちのことのみでなく、私たちの身近にいる子どもたちの問題でもあるし、またもっと遠い世界各地にいる子どもたちの問題でもある。

これから「震災後の子どもたち」の記事を通して、私自身も考えていきたいことがたくさんある。



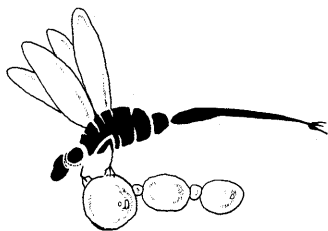
(お茶の水女子大学)

特集〈災害と子ども〉

淡路・阪神大震災

—— 父の場合 ——

前田 陽子



一九九五年一月十七日（火）未明、東京在住の私は小さな揺れを感じて目を覚ましていた。六時過ぎに起き出し、テレビのスイッチを入れる。「淡路島北部に地震」のニュース。両親（父七十歳、母七十歳）の住む明石と淡路島は、民家が見える程目と鼻の先。六時十分、両親宅に電話を入れる。話中。やはり東京に住む弟がいち早く

電話したかしら。とにかく娘を学校へ出さなくては、と、朝食の用意にとりかかる。十分程して再びかける。やはり話中。ニュースは大きな地震と伝えている。淡路島、神戸の情報は流れはじめ、明石の情報は流れない。弟宅にかける。寝ていて、地震のニュースも知らない。という事は……受話器がはずれていて……最悪の事態が脳裏

をかすめる。ニュースが深刻味を増して報道される中、娘を学校に出し、夫を起こす。夫は、これはただ事ではないと、ラジオのスイッチも入れず。私は電話をかけ続ける。七時を過ぎるとつながらなくなる。『阪神地方への電話は非常につながらなくなっております。緊急の場合以外はおかけにならないように』の案内がくり返される。救援活動の邪魔をしているのだろうか。でも、これが緊急でなくて何が緊急かの心境。夫はコンピュータでの通信、情報収集も試みる。ニュースは被害状況を伝え始める。が、私達の知りたい明石の情報はない。……「もういいよ。つながらないよ」と、半ば諦めた私の横で、我が家で可能な限りの通信を試みる夫……六時間近くが過ぎ、正午過ぎ。「おとうさん!! よかった、よかった!」夫がかけた電話が通じた。夫の甲高く叫ぶ声。机上には、どんな手段を講じても明石まで辿りつくための資料、メモが散乱し、いつの間にか

身支度まで整えていた。

無事を確認し、すぐにでも迎えにいくという私達を父は断わった。有難いがこれは非常事態である。来るに及ばず。来てはいけないという。母とは地震時の有様を話す。長電話は救援活動の邪魔になるからと切る。余震が怖い。

翌日から毎朝六時半、明石へのモーニングコールが始まった。二人の話を聞き、必要な物を送り、通信不能地域への連絡の仲立ちをする。電気はすぐ復旧したが、ガスと水がなかなかこない。マンションのひび割れが気になるが、マンション会社自体が被害にあっており、連絡不能。行政の対応には、誰も腹をくくって事に当たっていないと激怒。特に父は、戦時中の戦線での経験を引き合いに出し、緊急時の判断と行動に関して感ずる所、大いにある様子。

家の中は滅茶苦茶で、避難所へ行くよう勧めら

れるが、父は、このマンションが倒壊する時は避難所もだめだと、動こうとしない。他人の中では共同生活は、年老いて気ままに暮らしてきた者には敵しいと言う。出入りの電気屋さんが、部屋を片づけ、家具の位置を直してくれたと言う。再三、東京に避難するように勧めると、「まだ大丈夫。このマンションでも、生命の無事を確保できると、男性達は勤め先で必要とされはじめ、老人と女性と子どもが残されている。生活圈での諸問題には、この病気の老体もまだ役立てそうだし、今、東京に行ってしまうと、帰って後、諸問題ととり組む際、わずかでも周囲の気持ちとずれを生じうまくいかなくなると困る。日々の成り行きを肌身で知っておきたい。又、自分の病状をよく知る医者の方に近い」と、言う。

この父、実は四年前に直腸癌の手術をし、その後、パーキンソン氏病、小脳変性症と続いて難病を患い、一時は自分が誰かもわからなくなり、家

庭看護の限界と老人病院に入院。一時帰国した孫に看病され一念発起、リハビリに精を出し、医者も驚く程の回復を見せ、今は自宅療養中の身。神経系統の患いのため娘としてはこのような非常事態の影響、薬の確保などを心配し、強く東京に来る事を勧めるが、頑として首を横に振るばかり。母の話からは入浴、トイレ、洗濯など水の出ない不便、ガスが出ないため献立を考えるのが億劫、体を動かせない父を頼る訳に行かず、十三階からの水汲みの大変さなど、疲れが直に伝わってくる。隣人達の親切を感謝しつつ、気力が失せているのが痛い程わかる。父も時折頭痛を訴えるようになる。いよいよ心身共に休息が必要と思われ、片付けを理由に、私は明石に向かった。夫は何とんでも連れてくるように、地震から三週間、もう頑張らなくていいから、と言う。

明石では、母は疲れていた。私の滞在中、母はずっと眠った。父は元気だった。嬉しそうに私を

迎え、よく話した。この非常時、こんな時に人間は本性がよく見える。若者には感心。このマンションにも流言飛語が飛び交い、その対策に住

人、主に婦人、老人達が集まった際、ヒステリックな雰囲気、機転をきかした父の言が皆の気持ちを平生に戻した。こんな体になってもまだ知恵と経験で皆の役に立ってる事が嬉しい。聞きとりにくい俺の話を皆よく聞いてくれる。百六十世帯のマンション自治会の相談役になっている。電話で連絡をとりあい戦友会が動きはじめている。メンバーの安否を確認すると共に体験を共有しようとしている。又、趣味のローンボールの会再建に向けても中心になって動きはじめている等々。呂律の回らない舌でよく話した。一家を支えた青少年時代、戦時中と戦後抑留時代、商社マン時代の経験は、この地震後の今に役立っていると。お前とこんな話ができるようになるとは……。俺は三度死んだ。戦争と、病氣と、地震と。だのにまだ生

かされている。そして、まだ人の役に立ってる自分が嬉しいと何度も繰り返す。

病中の身に生きがいを見つけた父は、ここを動かない。

昔、写真で見た、父の凛々しい入隊時の軍服姿を思い出す。商社マン時代、眠れないと、薬を飲む父を思い出す。自分史を自費出版した直後、病に倒れ、転倒からの護身用ヘルメットを被り、表情乏しく必死に口許で笑おうとした父を思い出す。

今、目の前で相好を崩して笑う父は、ベッドから放り出され、家中が瓦礫の山と化した淡路・阪神大震災を経て、明石の好々爺になった。

(神戸っ子の一人として)

# 思い出すこと

清水 光子

波のようくりかえしおそってくる激しい機銃掃射の音がよくやくやみ、しばらくしてサイレンは警報解除を知らせて鳴りひびきました。屋外は夕暮の色が濃くなっていき、室内は黒幕の中、燈火管制下で闇です。ここ、北海道旭川市、終戦の

年の七月、疎開中のお寺の広間です。ふとんをうず高く積み上げて、その谷間に、そう、およそ二時間近く、三人の子ども達とじっと息をひそめていました。やがて、もう大丈夫だろうと窓の外をカーテンのすき間から見ました。その時、一緒に見ていたNが「あ、お星様がきれいー」と叫んだ

のです。私はびっくりして、空を見ました。なる程いくつかの星が輝いています、と同時になぜかこの子は命が短いのではないかと思えて……抱きしめてしまいました（そのNは五十歳をすぎずして健在です）。

空模様があやしいけれど、どうしても用事で三歳のTを連れて親しい老婦人を訪ねたのは八月も終わりに近くでした。用事をすませ四方山話をしているうち、やっぱり雷雨になり、外は夜のようにまっくら、雷鳴といなづまが同時のようになり、はげしい雨が滝のように降っています。Tは

物も言わず私の膝にしがみついて、「はやくお家へ帰ろうよう」をくりかえします。老婦人は「もうじき止みますよ。ゆっくりなさいませ」と言いながら、お菓子やのみ物、古い絵本を見つけてきてなど優しく気遣って下さるのに、「ねえお家へ帰ろうよう」をくりかえしていました。でも思いの外早く雷鳴は止み雨も小降りになったのでお礼をいって辞去しました。畑の中の近道を我が家へ

急いで歩く途中、ふと見ると、東の空に何と、二重の虹が立っているではないか。「Tちゃん、あれ虹が出ているよ」と教えたたん、半べそで歩いていたのが立ち止まって、目をすえて眺めているのです。まるで根が生えたように、「さあもういそいで歩きましょう」と何度か手を引っぱった揚句、その頃我が家で野宿することの厳しき、困難さが話題になっていたので、「じゃ、Tちゃん、今日はここに野宿ね」と、言いましたら、Tは目がさめたようにびっくり顔をして私の手を握って

歩き出しました。この事は私がいつまでも後悔として心に残りました。

私が幼年期からずっと、大人になる迄住み暮っていた家は東京の山の手の高台、崖の上に建っていて、東北側の縁側からずい分遠くまで（若い人はまさか？ と信じませんが）隅田川の花火まで見えました。関東大震災もこの家で逢いました。防風樹が植えられてもいなので暴風雨の時はその時の風向きでずい分と被害を受けました。雨戸をたてて、広い室に蚊帳を吊ってその中に食事などは持ち込んで（大ていおにぎり）すませたり。それがまるでおままごとのようで楽しかった覚えがあります。が、庭の栗の木が倒れたり、柿の木がまだ小さい青い実をつけたまま折れたり、咲きはじめたばかりのおいらん草やひまわりが無残に倒れて悲しい思いをしました。幼い心に木や草も命がある、生きているという実感がうまれたよう

に思われます。ずっと後になって嵐で倒れた街路樹のすずかけを見て女の子が「木がかわいそう！泣いているよ」と言ったとき、ぐっと共感を覚えました。

関東大震災の時、長兄（旧制高校生）がこの家の居間の鴨居をずっと両手で支え持ち上げていた姿が今でも目に浮かびます。その頃五歳位だった妹は「お家が倒れなかったのは大兄ちゃんが支えていたから」と大きくなる迄信じていました。ギリシャ神話の、大地を支えるアトラスのように思えたのかもわかりません。

高台に建っているこの家は水害を受けたことはありませんが、よく買物や散歩した神田川べりは少し大雨が降ると氾濫しました。舟で往来すると聞くと、それを見たいと母にせがんで叱られました。その大水が引いたと聞き、兄達二人が探検に行くというので、こっそりついていき、まだどす黒い水が所々小さな渦巻を作って流れていく上に

一本橋がかかっている、そこを渡って土手に上がったのですが、その目くるめくような緊張感、充実感は今なお鮮かによみがえります。

終戦間もなくキャサリン台風（？）が関東地方をおそいました時、東南に向いた我が家はもろに暴風雨を受けました。広縁の欄間のガラスがアツと言う間に吹き破られ、広縁はガラスの破片と雨水で一ぱいになり、雨風は容赦なく吹き込んでくる。その時、老父が板切れを見つけて来て、ゴム長のまま広縁に上がって高い欄間に打ちつけました。それを四歳のTは泣きそうな声をはり上げて「おじいちゃん、やめて！」と叫びましたが、父は無事に板をうちつけました。ぬれた服を着替えて座った父のひざにTは安心したように抱かれて、嵐の収まるのを待ったことでした。

阪神大震災に逢われた作家の藤本義一氏が震災直後、娘さん一家の安否をたしかめようとその住いを訪ねられたときの文章に「マンションは幸い



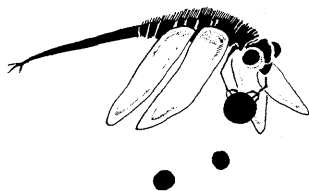
無事…中略…四歳の孫娘は「おじいちゃん！」と声をあげた。どうだった、と尋ねると「お家がいよいよしたよ。いろんなものがワッショイワッショイしたよ」と、答えた。自分も物書きとしてその表現には感心した」と、なお「その途中で野良犬の群れが大きなリーダー格の犬を先頭に、人の流れと反対に大阪の方へ行くのに逢った。自宅に帰ると庭にさまざまな鳥が集まっているのに驚かされた」と。

幼児は未分化と言われます。たしかに体力や知識は大人に及ばない。でも何かしら動物的ともいえそうな、大人たちがいつのまにかどこかへ落とし、失ってしまったものをもっていて、それを大人が、たよりになるたくましい大樹のようにある安定した環境をつくれれば実に素直にそこに順応し、さまざまな表現もするのではないでしょうか。しかも見事な回復力を発揮するエネルギーが豊かで「自然と一致する」とはこのような意味も

あるかしら。

関東大震災のあと、お茶の水幼稚園の焼跡に立たれたときの倉橋惣三先生の「焼跡に立ちて」と「大災と幼児教育」をよみかえし四分の三世紀を経た今にして、少しもかわらない、というより当然と思える大人の子どもへの持ちたいねがい、あり方を教えられたことです。

(音羽幼稚園)



# 災害と想像力

——「鯰絵」の向う側で——

森下 みさ子

マグニチュード6・3と推定される直下型の大地震が、人口の密集する都心部を襲った。といっても、先頃の神戸の大地震でもなければ、関東大震災でもない。頃は江戸時代も末期の安政二年（一八五五）十月二日の夜も更けた十時すぎ、江戸市中でのことである。ガス漏れによる爆発や高層建築物の倒壊こそなかったものの、木造の家屋は軒並み崩れ落ち、火の手もあがって、都市生活

者に多大な被害をもたらしたことは確かである。けれど、ここでは当時の被害の状況や復興の様子を伝えるのが目的ではない。むしろ降って湧いたような災害によってはじめて浮かび上がってきた、江戸に住む人々の凶たく軽妙な想像力の産物を披露することにある。それらを今日総して「鯰絵」という。文字通り地震の原因と考えられていた鯰を様々にデフォルメした、多くは一枚刷

りの絵のことである。

たとえば、雷神であり水神でもある鹿島神やエビス神に、巨大な石（これをかな要石という）や瓢箪によって押さえ付けられている大鯰の図。横には「地震御守」の字が付されているものもある。あきらかに大災害が二度と起こらないように、地震の源である鯰を神様たちに押えていてほしいとの願いが込められている。かと思ふと、「鯰おおか大火場ばや焼」などと付けられた一枚は主旨は同じだが、題から見て取れるようにいささかこっけい。エビス神が包丁を振って組上の鯰を料理すると、傍らでかば焼きにして食べさせてくれるという代物である。

これらは皆大なり小なりに、あのヌメヌメした黒光りする生き物の胴体をさらしているのだが、こういう絵よりも目につくのは、鯰を大胆に擬人化して描いた「鯰男」の姿である。波模様様の着物の裾もはだけて、人々に打ちたたかかれている鯰男

もいれば、瓢箪模様の揃いの着物で徒党を組み雷神・風神に煽られながら、鹿島神に守られた町人たちと合戦を交えている鯰一派もいる。そのいっぽうでは、エビス棟梁のもと粋な大工のいであちで太平の「平」の字を建てている鯰たち、地震に効く薬を商う薬売りや、七つ道具を背負った弁慶に身をやつす鯰男までいて、どうにもこうにも憎みきれない愛嬌ぶりである。

いったい彼らは何者なのだろう。地震を起こすだけの単なる悪党ではなさそうだ。あまたの「鯰絵」を収集して研究を積んだオランダの文化人類学者アウエハントは、その大部な著書（『鯰絵』せりか書房）において、「鯰絵の表象世界では、その主要な表現が両義的構造と密接に関連して特徴づけられており、それは民族宗教に根をもつ觀念と結合し、地震が起きるとある特殊な形で復活する」と述べている。すなわち、鯰男が果たす役割は、破壊者でありながら建設者、人と対立しつ

つ調和をはかり、しかもそれが人々の笑いを誘うほど道化的であることにおいて、社会・文化の攪乱者であり創造者でもあるトリックスターだといふのである。いいかえれば、地震という人為を超えた災害が人々の想像力にもたらしたものは、善悪の判断を超えたところにある力の作用、まさしく社会の「地殻変動」という実感である。アウエハントは、引用したように鯨絵の奥にうごめいている民俗宗教のダイナミズムに向けて筆を進めているが、ここでは民俗への深入りは避けよう。それよりなにより、この時勢ならではの鯨たちの活躍ぶりが心憎い。

もう少し鯨のバリエーションを加えると、鯨の塩吹きのように金貨を吹き上げている大鯨、金貨しの口から金貨を吐き出させて皆にばらまいている「世直し鯨」、さらには要石にとらえられた籠の鳥の遊女鯨に差し入れする鯨女。鯨たちが演じる奇抜なポーズの背景には、江戸に生きる人々の

心情が透けている。地震よりわずか二年前にペリー来航が伝えられ、黒船の脅威が人々をパニックに陥れている。いっぽうで、貨幣経済の浸透は貧富の差を動かしがたいものにしていった。その典型は、お金のために囲われて身をひさぐかない遊女たちの哀れな姿に現れている。不安と不満と不穏と不当、江戸末期の社会はもうすでに揺れはじめており、いっそのこと大揺れに揺れて壊れて、いっさいがっさい造りなおしてほしいほど「革命的」な気運が鬱積していたともいえる。そこにやってきたのが巨大鯨、すべてを御破算にする大地震だったのである。もちろん、人々はひとしなみに害を被り、その後で世の中を造り変えるほどの算段があったわけではない。自分の身を守り、食べるもの住むところを確保するのに精一杯だったことだろう。それでもなお、こうした鯨が何枚も何枚も刷られ売られ買われて、災害直後の人々の手にわたり目に供し、おそらくは願いと笑

いをもって迎え入れられたにちがいない。それは、なんともおどかでしたたかな力である。その力を沸き立たせ奮い起こさせる想像力の根っこが、江戸の地層の深部を貫いていたということだろうか。

さて、すっかり江戸の民衆になじんでしまった鯰たちは、絵の中で「地震けん（今でいうジャン

ケン的一种）」をし、髭の引っ張り合いをし、はやり唄を口ずさみ、浮かれ踊って遊んでいる。中には、親子で仲睦まじく餅をつまんでいる鯰一家の絵もある。その頭上には、地震の際起こりやすい事故のあれこれが餅や団子の品書きになって並んでいる。だらりの帯も愛らしく、手鞠つきつつ「地震鞠唄」を唱える鯰娘まで登場している。こうして「擬人化を介し

て人間的なレヴェル——いわば身近で親しみあるやり方（アウエハント）で地震という大災害がとらえられるとき、遊びと笑いによる災害から改革への「変換」という人間の処し方に、子どもの遊びにも通じていくような、なにか柔軟で強靱な生のありようを感じるのは、ひとり私だけだろうか。

（聖学院大学）



▲『鹿島神鯰おさえの図』（No.2273）  
（『鯰絵』せりか書房より）

# 戦争という「災害」

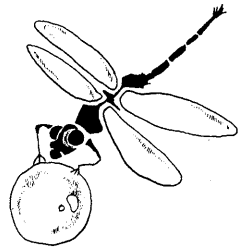
小川 剛

戦争が終った時、私は小学校五年生。その年の三月十日、東京大空襲がありました。

戦況がきびしくなり、私は家族と離れて、一人、宮城県の叔母の家に縁故疎開をしていましたが、空襲の数日前、何か家庭の事情でたまたま、東京の両親の所へもどってきていたのです。そして、実家のある品川で、東京の大空襲を眼<sup>ま</sup>のあたりにしました。空は真っ赤で、焼夷弾が落ちる時に、パァッと花火のように落ちる。「あ、おとした、おとした」などと言いなからそれを見ていたのです。

爆撃は江東区が中心と聞き、深川の森下という所に叔父が住んでいたものですから、翌々日の十日、両親と一緒に叔父の安否を確かめに出かけて行きました。

東京駅から歩いて行く途中、あたりは文字通り“死体累々”。戦争のむごさときびしい現実を眼のあたりにさせられました。少し行くと、通りの所に何とグランドピアノが一台おいてあり、”ご自由にお持ち下さい”と墨で書いてあるのです。私は小さい時から音楽がとても好きで、そこにグランドピアノが…、”ご自由に…”と。思わず立



ち止まって、ポロポロッと音を鳴らしてみましたね。死体累々の状況の中におかれているピアノを目の前にして、音楽好きだった私のピアノに対するあこがれのようなものもあったのですね。そして母に「このピアノ、ほしい！」と言ったのですが、あの状況ではどうしようありません、心を残しながら通りすぎたのです。

そこには、戦争という爆撃で人の命が奪われていく悲惨な状況を眼のあたりにするということと全く異質な経験が、となり合わせにあったのです。

帰りにまた同じ道を通ってきた時は、もうありませんでした。誰かがご自由にお持ちになったのでしょうか。私みたいな人がいたのですね。弾いてみた時、ちゃんとした音がでたので、焼けただけだ、というのではない。その辺は焼け野原で、道の端っこにポツンとグランドピアノが置いてある——何というか、神の啓示の様でした。叔父の家

族を捜している間、五時間ぐらい経っていただろうか。その間に私と同じように、ピアノを鳴らしてみても、そして、運んだ人がいたのですね。

私は、あのピアノを運び出した人や持って行った人がいたということに、心のゆとりのような人間的なものを感じました。人間であることの証は、単なる機能主義に終わらず、もっと幅の広いものを持っている、意外性を生かしていけるということです。

何であそこにグランドピアノが置いてあったのか、そして、それに魅かれる人がいたのか……

災害というものを見る時、良い意味で、複眼的に見る必要があると思う。被害という一面的な見方でなく、そこに含まれている意外性、本質的な部分も重ねて見ることも大切なことではないか。災害に備えるということは大事なことでけれど、災害がおきてしまった時、非日常的な何かが見えてくるチャンスもあるということです。極めて本

質的な部分と非日常的な部分が重なって出てくる災害というものの中から、意外性をつかみとっていくということも必要なのではないかと思えます。ただ全てを灰色に塗りつぶし、希望を奪うということだけで災害を見ると、その後の復興のきっかけがなかなかつかめない。

今回の神戸の場合もそうですね、人の温かみとか……。人間であることが機械とちがっているいろいろな点で創造的な形での問題解決を可能にしていく部分もあるわけです。今までどちらかというところとしがちな問題を掘りおこしてくれる。そういう時に現れてくる人間の持つ意外性をくみとってくれるような、そんな非日常的なものが出てくるというのも災害の一つの特色でしょう。

我々の時代というのは、小学校二年生の時に第二次世界大戦が始まり、そんな息苦しい雰囲気の中でも、東京の中流階級の子ども達にはまだ、よく言われているような追いつめられた雰囲気はな

く、普通の子どもの生活を送っていたように記憶しています。それだけに死体累々を見た時に、隠されていた戦争の姿を見せつけられた思いがしました。たまたま、東京にもどってきたその一週間が、私にとって非常に密度の濃い体験を与えてくれ、軍国少年だった私も一〇〇%変わりましたね。事実を見ないと、本当の姿は分からないような気がするのです。そして、死んだ人の殆んどは、何も悪いことをしていない普通の市民だということもあとで分かったのです。戦争体験を観念ではなく事実としてつきつけられ、そのことが私の原体験となり、その後、強い反戦の信念のようなものを持つようになったのです。そして、それが今の私の生き方の基盤にもなっているのです。

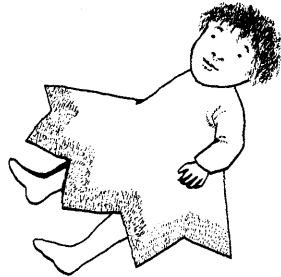
よ。(談)

(お茶の水女子大学)



# 子どもに 育てられる

丹野 禧子



イヌフグリの青い小花、カキドウシの赤紫色の小花に埋めつくされた畑の土を掘り返す。力を込めて土をひっくり返す。春のひざしは私の額に汗をじわりとよぶ。

「先生！ 何してるの……」  
F子がそばに寄ってくる。

「ああ、おいでなすった……」  
私は「思うつぼ……」と心の中でニンマリと笑う。私は胸の名札でF子の名前を確認すると、「Fちゃん、何してると思う？……」  
「シャベルでほってる……！」  
「うん、シャベルでほって何してるんだ？」

「あのね…畑作ってるの？」

「あたり！」

「大変な事してるね」

「大変な事？」

「うん」

「大変な事かもしれないけれど、大変な事頑張ってる後にはけっこういい事があるのよ。きれいな花が咲いたり、美味しいものが食べられたりね

……

「ふーん、いい事があるの」

「そうよ」

「手伝ってもいい？」

「どうぞ！」

「じゃ、シャベル持ってくるね！」

勢い良くシャベルのしまつてある物置にかけ出していくF子のうしろ姿を見て、「私の作戦勝ち……」と思う私。しばらくするとF子は小ぶりの作

業用シャベルで私と一緒に土を掘り返しはじめた。

「先生力持ちだね……」

「へへへ、朝ゴハンいっぱい食べたからね」

「ふーん、大人だからと思ったけど……」

「あっそう……」

「私、子どもだから、あんまり力ないのよ」

F子と私の姿を見てM子がやってくる。

「何してるの？」

「畑作ってるの」

「なんで？」

「いいもの作ろうかと思ってね」

「いいもの？……」

「うん！ 種を蒔いたりして、花を咲かせたりとか

……

「私も一緒にやっていい……」

「どうぞ」

「シャベル持ってきてよう……」とM子が物置の方へ

かけ出していく。

F子は無言で私とM子のやりとりを見ている。何か不機嫌そうな感じで、表情が動かなくなる……私の顔をジッと見上げながら、「なんでM子に教えるの?」とがめるように強い口調で言う。

「あら、いいじゃない、M子に教えたって」

私のF子に返す言葉も少々強くなる。

私にしてみれば、F子と私の姿を見てこの動きの中に入ってくるM子の姿は、私の計算どおりの姿であり好ましいものだった。

M子がシャベルを持ってきて土を掘り返しはじめる。シャベルに足をかけて掘るのが上手なので思わず、「M子ちゃん、シャベルの使い方上手だね」と言う。

F子は「よいしょ、よいしょ」と声を出す。

F子は「先生一人だけだからね!」と言う。

「『一人だけ?』って何?」と思ったけれど、聞き

流す私。T子、A子がやってきて、「何してる

の?」と言う。「あのね、畑作ってるの」とM子が答える。「そうよ、畑作ってるの。けっこう大変だけれどね、あとでいい事あるからね……」と私。

「いい事?」T子とA子が聞き返す。

「うん、畑作るのは大変だけど、種を蒔いたりするとね、きれいな花が咲いたり、美味しいものが食べられたり、後からはいい事があるの……」

「私達もやっていい?」

「うん、どうぞ」「いいよ」と答えるM子と私。

ところが、F子は「一人だけって言ったでしょ! いい事は人に教えるもんじゃないの。どうしてしゃべっちゃうの。もうこれで二度目だからね!」とM子の時よりかなり強い口調で言う。「なんで? いい事教えちゃいけないわけ……!」と私。F子はプーンとふくれてシャベルの手を止める。

E夫とS夫が「なにしてるの?」と声をかけてく

る。

「あのね、畑作ってるの。ちょっと大変だけど、大変な事の後には……」と言いはじめると、「何回言ったら先生はわかるの！もうこれで三回目だよ。仏の顔も三度っていうの知ってる？ いい事は教えちゃいけないって言ったでしょ！」

私の顔をニラムムラムムようにして言うF子の剣幕にア然とする私。ムラムムと怒りの感情が湧いてきて「Fちゃん、どうしていい事を教えちゃいけないわけ？ そういうのは心のブス、心のブスは自分で直さなきゃ直らない、毎日可愛いと言っているうちに顔のブスは本当に可愛くなるけど……」なんだかわけのわからない事を言う私。

この場面は、「おもいやり」について知りたいたと、園内研究で取り組むきっかけになったF子との一コマなのです。

「まったくF子って……」がいつの間にか、この園の子どもの心には「思いやり」の気持ち欠けているのではないかと思ひ込むのにはそんなに時間はかかりませんでした。

あれから四年が過ぎてF子にヒドイ言葉を投げてしまったな……とか、私自身の仕掛人としてのイヤラシサとか、思い込みのヒドサ等を反省しうなだれてしまうのですが、あの時点では、私は怒りに燃えていたのでした。「理では動くけれど情では動かない地域だよ」と言われて転動したK園へのイメージは、理に弱い私の心にカギを一つかけてしまい、心を開けないまま、子どもと向き合おうとしていたのでした。

あるがまま、受け止める事の出来ない私は相手の心のスキをついたり、自分の価値観に合わない事を探して、非難してみたりすることで、自分の心のカギに対しての辻褃を合わせていたと思うのです。ナ

サケナイ……。

思いやりの姿は、今を生きる子ども達はあまり持ち合わせていないものなのではないかとF子の姿とダブルさせて思い込んだ私は、思いやりの姿を求めて記録を取りはじめました。「思いやりのある子に育ってほしい」という願いは、K園の親の願いのナンバーワン、市内の十五の園の「こんな子に育ってほしい」の親の願いのナンバーワンなのです。又、K園の教育目標にも「思いやり」の言葉があり、子ども達の「思いやり」をどうとらえ、育んでいったらいいかを探るため、まず、私達がこれが子ども達の「思いやりの姿だ」と思うところを記録しはじめたのですが……。

「思いやり」と「おせっかい」の区別があいまいだったり、保育者のイメージも少しずつずれがある事もわかり、最初の一年は、事例の話し合いも暗礁に乗り上げがちでした。



▲いい事があった！……おもいができた！

「思いやり」とは何だろう……いろいろと文献を調べているうちに、平井信義先生が「思いやり」の精神構造とその発達過程について書かれたもの（大妻女子大学紀要 昭和57年3月・平成3年3月）に出会いました。その中に、「思いやり」とは究極的には「愛」に通じるものであり、「相手の気持を汲む心」とありました。「思いやり」は「共感」に通じ、相手の気持に共感し、共感するからこそ自発的に引き起こされる情緒的なものと理解したときに、俗に言う「目から鱗」が落ちました。

それからは、記録を取るのが楽しくなり、自分達の記録を読んだり話し合ったりする中で、微笑んだり、笑い転げたり、涙ぐんだり、子どもがおもしろく、愛しく思えば思う程、子どもの「思いやり」の姿が溢れる様に見つかる様になったのです。

そして、私自身の心のカギもいつの間にかはずれていたのです。

泣いている子を見て「どうしたの」と問うたり、「なぜなの」と問い詰めたりしないで、泣いている気持ちに共感できる保育者になりたい、子どもの良いところも悪いところも含めて固定観念を持たずにありのままの姿を受け止めていきたい等、自分の保育への指針が明確になってきたなと思うのです。

Fちゃんありがとう！ 「子どもに育てられる」を深く実感したのです。

三年間のまとめの冊子のインクの匂いをかぎながら、四年生になって今は遠くへ転居してしまったFちゃんの顔を思い浮かべている私です。

（習志野市立屋敷幼稚園）

ある日の育児日記から

(57)

佐藤 和代



圭と有のいとこたちが三人、三日間泊まりがけで遊びにきました。去年、茨城にログハウスを建てて移り住んだ一家ですが、「村で農業の一斉散布があるんだって。危いから、子どもだけ預かってくれない？」と頼まれたのです。田舎暮らしはうらやましいけれど、こんなこともあるのですね。さて、急に五人の子持ちと化した我が家。圭も有もあまり騒がしいほうでないけど、これだけ子どもがいると興奮状態で、騒々しいこと！でも、いつも少食な圭がたくさん食べるし、家の中で遊ぶことが好きな有がどんどん外へ出るし、こ

れぞ子どもらしい生活、という感がありました。大家族で育つと、たくましい子になりそうね。子どもたくさんいいな。…とはいえ親は大変。家でもプールでも公園でも、「全員そろったー？ 行くぞー！ 食べるぞー！ 片づけてっ！」と、号令ばかりかけていた気がします。三日もすると声が枯れてゼーゼー。失業中ゆえに三日間つきあわされた敬は疲れはて、「昔の大家族の家長が絶対的権力を握っていたわけがわかったぞー。あれはきつと、号令一下全員が従うようにしておかないと、自分が身がもたなかったんだ。生活の知恵だ。」うーん、この新説、一理あるようなないような。



「10を頭に5人の子が…」の図

## 森は生きている

小山 幸子

ゴールデン・ウィークの間に山へ行ってきた。

さわやかな五月の晴天に新緑が美しく映え、木々は新しい生命の芽吹きに輝いているようであった。

地面を見てみよう。ここにも枯れ葉の間から新しい生命の息吹が顔をのぞかせている。それも、押しくらまじゅうでもするかのように、ぎっしりとかたまつて出た新芽があちらにもこちらにも点在している。動物の糞の中に排出された種が発芽すると、このようにぎっしりと

かたまつて芽を出すのだという。

もう少し上にも目を向けてみよう。木の幹にできた空洞の中にもぎっしりとかたまつて芽が出ている。こちらの方は野ネズミか鳥が貯め込んだ木の実が発芽したのだろうという。動物たちが木の実を食べながら移動して排泄する過程や、あちらこちらに木の実を貯めこむ行動が森の木々の次の世代をあちこちへと運搬する役割を果たしているのである。植物と動物との間の目に見えない深



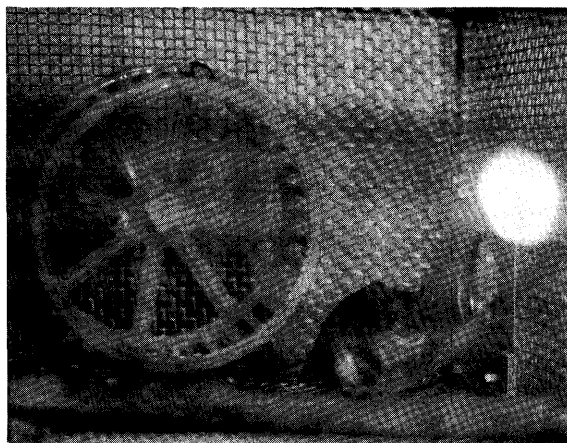
い関わりがそこにはある。

動物を観察する仕事をしていて時々思うのは、動物の生活が一般にはほとんど知られていないことである。山へハイキングに行ったとして、道のわきの斜面が動物たちの生活の場であることを感じる人はどの程度いるであろうか。緑に感激し、鳥の声にうっとりする人は多くいてもその同じ場所にどれだけほかの動物種が息しているのか考える人はどれだけいるであろうか。しかし、目にはつきにくくても山は「何もない場所」ではなく、町中と同様に生活の場なのである。

目に見えるもの、耳に聞こえるものは注意を引きやすい。そのようなものの存在は信じることが容易である。けれども、私たちの身の回りには、超現象でなくても、人の目につきにくい場所で生活し、人の耳に聞こえにくい音声でコミュニケーションをおこなっている動物が数多く存在している。目に見える木の芽にさえ動物の陰ながらの影響が存在しているのを見ると、例えば、知らない間に誰かが自分の仕事を手伝ってやっておいてくれた

ことを知った時に、その人物に対して感じるような存在感と同じ存在感を動物に対して感じるのである。

動物の観察を実験室の内外でおこなう楽しみのひとつは、このように普段は目につかない気づきにくい現象を目のあたりにすることであり、また目にした現象の背景



▲写真1  
アカネズミ。名前のとおり、腹部以外は美しい光沢のある赤茶色をしている。

にあるメカニズムを推測することではないであろうか。

ゴールデン・ウイークの間に行ってきた山で案内された場所には、しゃがみこんでみると木や草の根元にネズミの巣穴の入り口が無数にあった。丸い入り口は、直径が三〜四センチほどで、山に住むアカネズミ(写真1)というネズミの巣と見られた。同じ場所にいくつもの入り口が固まって見られるのは、同じ巣の出入り口が何か所もあるからであろう。穴の中に指をそっと入れてみた。

中は空洞であった。そして、奥の方へとその空洞は続いていた。穴の前にはやはり幅が三センチほどの細いけもの道ができていた。いつも通るところは、踏み固められるためにこころなしかくぼんで多少つや光りしているのである。そこは、まさしくネズミのミニチュアワールドになっていた。ケネス・グレアムの著した『たのしい川べ』という子ども向けの話を彷彿とさせる世界がそのままそこに存在している気がした。私は胸がわくわくし、それはまるで外国に初めて行った時にそこで目にし、耳にするであろうものへの期待に胸が膨らむ時のよ

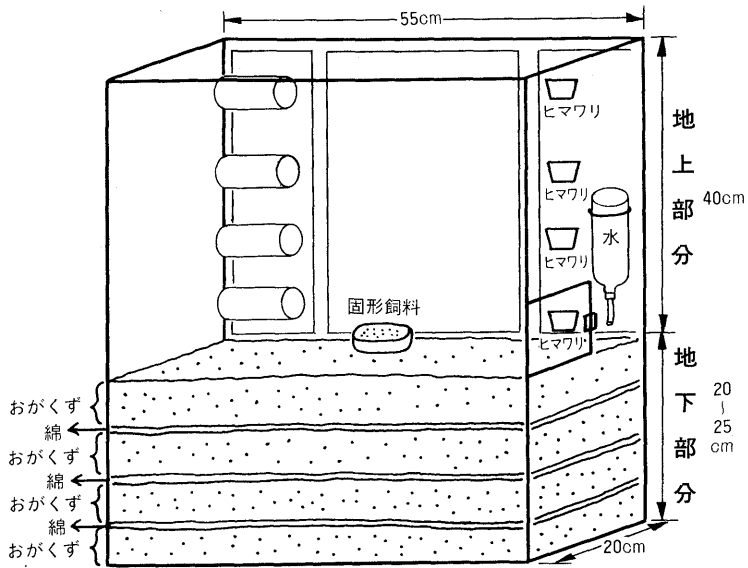
うな気持ちである。ネズミがこの道を利用し、巣を出入りする姿が目に見えかぶ気がしたのである。

期待にわくわくする私の心には、以前に実験室内でおこなったいくつかの実験のことも思い出された。

無色透明の大きなアクリル板を張り合わせて縦長に作った箱の中に、下から何十センチかおがくずと綿を交互に四層状に入れて、ネズミに巣を作らせたことがあった(図1)。綿を入れたのは、おがくずだけだとネズミがせっかく穴を掘ってもそれがトンネルにならずに崩れてしまいやすいからである。その箱に山で捕獲されたアカネズミを入れ、箱のまわりは黒い紙でおおった。アリの巣を作らせる方法として小学校時代に科学雑誌で読んだことのある方法であった。餌には一般によくネズミを飼うのに使われる固形飼料(ベットのハムスター用に市販されているものと同じ)のほかヒマワリの種を与えた。

そして、二週間後。

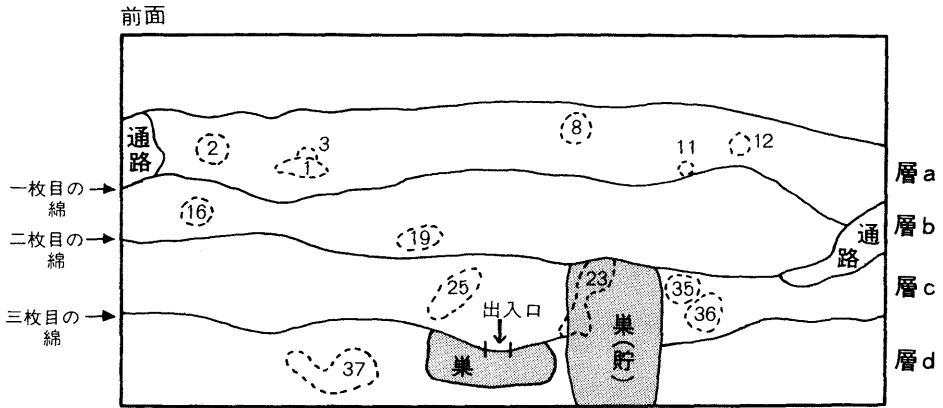
箱のまわりの黒い紙をそっとはずした。



▲図1 実験装置全体図

ときめきの一瞬である。さて中はどのようなになっていたか。P.42の図2を見て頂きたい。これは、黒い紙を取り除いた直後に箱を横から見た様子である。中央下部には、巨大な巣と貯蔵庫があった。縦長の方の貯蔵庫は、その下三分の二ほどがヒマワリの種でぎっしりと埋まり、上には空洞があった。貯め込んだヒマワリの種の上を寝場所にもしていたのである。餌の上で寝るとはまさに極楽ではないであろうか。左側にある横長の巣にはヒマワリの種はなく、寝場所だけにしていたらしい。巨大貯蔵庫へとつながる通路と上からの出入り口が横長の巣にはついていた。

次に中のネズミを取り出して別のケージに移し、箱の中のおがくずを上からそっと掘り出して試してみた。まずはいちばん上の層である。箱の外から見えていた巨大貯蔵庫のほかにも、あちこちに一か所あたり数個から数十個の単位で貯蔵されたヒマワリの種が出てきた(図2では番号のところ)。そして、一枚目の綿が顔を出した。この一枚目の綿をめくってみると、驚いたことに綿



▲図2

黒い紙を取り除き、実験装置底部を前から見た様子。横線は綿の位置を表わす。線を境にしたおがくずの層を上から層 a, b, c, d とする。図の中で点線に囲まれた部分はヒマワリの種の貯食位置を表わし、番号は通し番号である。貯食位置は前面に近いもののみが記されている。

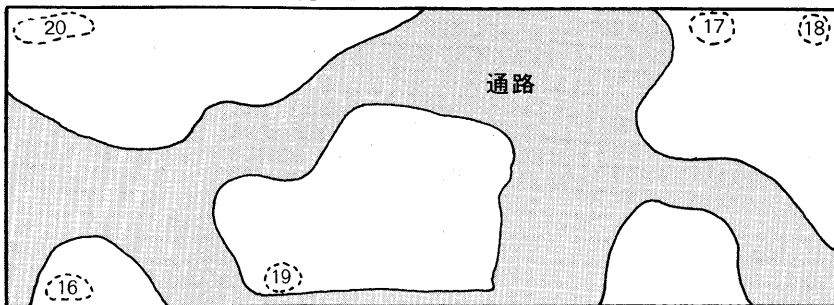
の下には縦横に通路が走っていたのである。二枚目、三枚目の下もそうであった(図3)。

このような巣造りの実験からどのようなことがわかったであろうか。

動物が食べ物を貯めこむ行動は、貯食と呼ばれている。巣の中のある場所にたくさんの餌を貯食するのは巣内貯食と呼ばれる。そして、少しずつ分散して貯食するのは分散貯食という。実験室の中での実験の場合には、箱全体が巣とその周辺通路になってしまうが、巨大貯蔵庫とその周辺のいくつもの貯食場所は、巣内貯食と分散貯食に相当すると考えられた。そして、その分散貯食はまったくでたらめにあちこちに貯食するというよりも通路わきや通路下に多いことがわかった。野外では、地下通路内の貯食よりも、巣の外での貯食でしかも一か所あたりの貯食数の少ない場合に分散貯食ということが多い。地下通路にどの程度分散貯食をするかはわかっていない。実験室とちがって行動可能範囲が広ければ、地

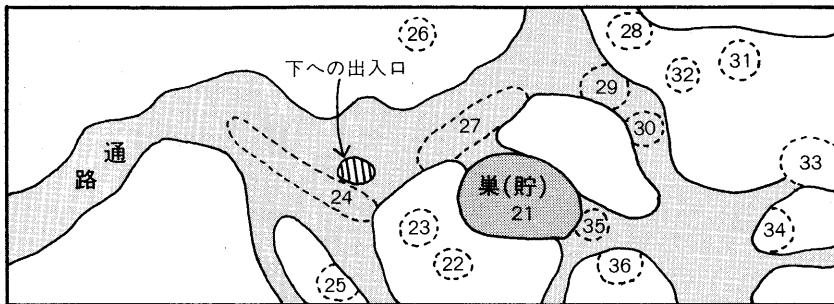
層b

一枚目の綿の下 上から見た形



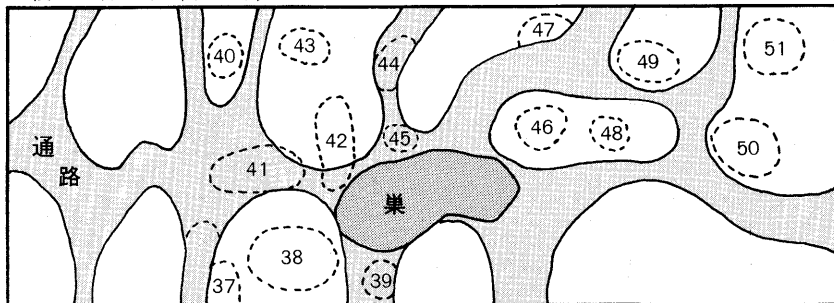
層c

二枚目の綿の下



層d

三枚目の綿の下 (最下部)



▲図3 層b, c, dに見られた通路(着色部分)。点線と番号については、図2参照



▲写真2

ヒメネズミ。アカネズミの近縁種で食性はほとんど同じである。写真で見ると、アカネズミとのちがいははっきりしないが、大きさはアカネズミよりひとまわり小さく、毛の色はアカネズミより光沢がなく、赤みも低い。また、アカネズミより目が小さい。

下通路内には分散貯食はしないのかもしれない。

アカネズミのほかにも、ヒメネズミというひとまわり小さくて、アカネズミと種類の近い野ネズミを使ったこともあった(写真2)。このヒメネズミの場合には、どのように貯食するかを調べた以外に、その貯食した場所を記憶しているかどうかを調べてみた。そして、おもしろいことに、その結果、ヒメネズミの場合には、貯食した場所を覚えていないことがわかったのである。嗅覚が発達している彼らにとっては、場所を覚えていなくても、またにおいで探し出せばよいのかもしれないということがその時には考えられた。しかし、最近の研究では、アカネズミの

場合には記憶しているという結果もあり、必要性の有無の問題ではない可能性が示唆されたほか、近縁種間での種差の可能性が示唆され、その原因も問題として浮上してきた。記憶しているか否かによって埋められている食べ物を探し出す効率がどのように異なるか、等々、問題はいろいろと残されている。そして、彼らが、そのようにして貯食したものを忘れてしまったり、覚えていても取り出さなかったりしたものが山のあちこちに残される結果となり、それが発芽すると次の世代の森の木々へと育っていくのである。まさに動物が森を育て、森が動物を育てているといえよう。

山でアカネズミの巣を見た時の私の頭に浮かんできたのは、以前におこなったこのような実験とその時の疑問である。

自然界にはまだまだ未知のことが多い。動物がどのように生活をしているのか、そして、その生活が季節によってどのように変化するのか。厳しい冬の食条件、温度条件をどのように乗り越えるのか。そのような乗り

越え作戦の一つが貯食であり、動物によっては冬眠もそうであろう。このような動物の生活を野外観察し、実験室で細かく分析していくことは、私たちが身のまわりの自然を理解する手助けにもなっていく、さらには、人間本位でない、自然の現状に促した自然保護のありかたを考える手助けにもなっていくことと思う。動物の野外観察と実験室研究とはその意味で切り離すことのできない相補的な関係にあると思う。

動物飼育是否論というのがある。動物を飼うのはかわいそうだという考え方と飼うことを肯定する考え方である。私は確信をもって肯定する。なぜならば、動物を閉じ込めてかわいそうだと言うよりも、飼育することによって動物をよりよく知り、動物をより身近に感じることの方が、真の自然保護へとつながると思うからである。相手を知り理解することが、相手の本質に合った対処をすることへとつながるのは、何も「相手」が自然でなくても、すべてにおいて言えることではないであろうか。そして、たとえ飼育しても、飼育のしかたによっ

て、かわいそうかそうでないかはかなり変わるといふことも重要なことであろう。相手にとって良い環境を提供することは、相手が何かの中にいるか外（すなわち自然の中）にいるかによって変わるものではないと思う。恐らくは、より深く動物を理解し、より良い環境を提供しようとする姿勢が、これからの自然保護にとって基本的にもっとも重要なのではないであろうか。そして、動物以外の対象にもこれは言えそうだと思う。

いろいろな動物を飼ってじっくりと観察してみようではありませんか。

（聖徳大学短期大学部）



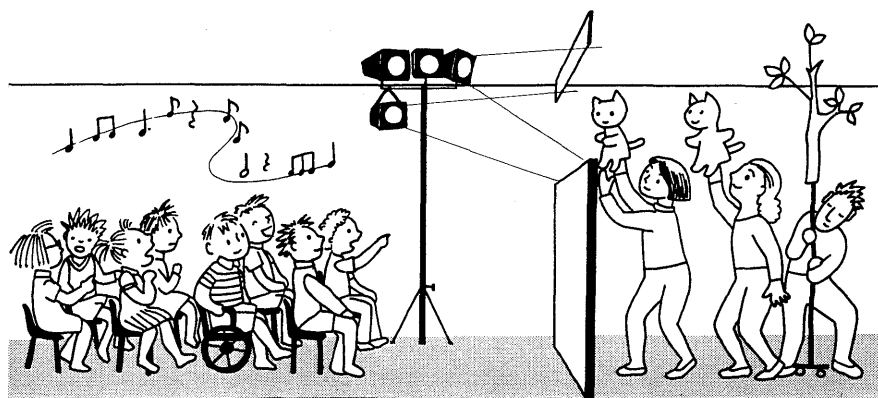
▲写真3 山は「何もない場所」ではなく、動物の生活の場なのである。



# ここから先は子ども席

—ちかごろ思うこと(1)—

永野 むつみ



カット 山根 裕子 (ひぼぼたあむ)

人形劇を観なくても子どもは育つ

「お待たせしました。開場です」

ドアを開けると、三十分以上も前から並んで待っていた観客がなだれ込んで来る。公立図書館の視聴覚室。利用者拡大を目的とした図書館主催の人形劇公演だ。主な観客は、幼児とその保護者。低学年の児童はいるが高学年はいない。図書館の利用自体が少ないそうだ。

保護者に手を引かれた子どもの足は、宙に浮いている。引きずられていると言った方がいくらいだ。

「前よ、前よ、前へ行きなさい」

保護者たちの声が会場内に響く。

私たち人形劇団「ひぼぼたあむ」では、最大観客数を百五十名としている。すべての席が「一番良い席」になるように。そして、子ども席とおとな席を分け、子ども席用として手作りベンチを持参している。

「ベンチ席は子ども席です。おとなは後ろの方へお願いします」

声をかけ続けないと、親子が並んで座ってしまふ。前列におとながそびえ立つように座っている。ここから前は子ども席ですの看板がむなし。

しかし、いったん腰を降ろした方に移動をお願いするのは、勇気がいる。はずむ気分を壊してはいけない。ネガティブな物言いは避け、できるだけポジティブにする。しかも全体には叫ばない。一人ひとりに個人的にお願いする。劇場でのルールを知らないことは恥ではない。劇場体験が絶対的に少ないのだ。これは子どももおとなも同じだ。そのつどマナーを伝えるのは、主催者と劇団の仕事の一部だ。根っこにあるのは、みんなで楽しもうよ、ということ。おとなが「私の子ども」から「私たちの子どもたち」と視野を広げることと解決できることも多い。

「うちの子は、まだ一人では観られませんから」

あくまで親子で並ぶことに固執する方もいる。一人で座って観られるようになってからが「観客年齢」だと考えているが、劇団主催公演以外で年齢を限定するのはむずかしい。しばしば0歳からの「観客」を覚悟しなければならない。

「では一緒に、あちらの席ではいかがですか」

子ども席とおとな席の境めの列を勧める。「だっこ席」と私たちは呼んでいる。

「あら、ちょっと後ろね」

「でも、見えないことはありません。舞台が高いので、却って小さい方には見易いくらいです。あまり前だと上を見上げる格好で疲れますもの」

「あっちの方が良い席だって。Aちゃん行こう！」

再び子どもの手を引っぱって移動する。この間、

子どもは無言。子どもの意思はないのか。保護者の迫力に圧倒されているのか。

「じゃあ、アンタはここにいなさい。お母さんは後ろに行くからね」

「そうね。今日は一人で座れるんじゃない？ 他のお友達も一緒だし」

子どもの年齢や、様子を見ながら私たちも声をかける。半分は子どもに、半分は保護者に対して。昨日までは離れられなくても、今日からは大丈夫ということもあるのだから。

これですんなりと離れられる親子もいるが、ダメな場合もある。親の方が手離せないのだ。

「大丈夫？ お母さんは後ろにいるからね。がんばってね。本当に大丈夫？」

あまりにいていねいな別れ方をするせいか、子どもは却っていぶかしがり、不安げな表情になる。無理に離れても、保護者の後ろをベソをかきながら追ったりする。

「どうして席を立てて来たの！ 前に座っていなさいって言ったでしょ！」

叱責の声。ピシヤリとたたく保護者さえいる。みると確かにその子どもの席には、すでに他の子が

座っている。もう元には戻れない。どうしよう。もはや泣くしかない。楽しいはずの人形劇場が涙、涙で始まってしまふ。ついだての後ろでスタンバイしている私たちの耳に、しゃくりあげる声がつきささる。

こんなときだ、人形劇なんか観なくても子どもは育ちますよ」と呼びかけたくなるのは。

## 親心 1

そして終演後、追い打ちをかけるようにこんな光景も目にする。やつぎ早に子どもにも質問する保護者たち。

「どうだった？ おもしろかった？」「どこが？」

「ただおもしろかっただけじゃわからないのよ。どこがってちゃんと見えなくちゃ」「どんなお話だったの？ 言ってごらんさい」「……」。

しだいに詰問調になっていく。傍目八目、おかめはちもく聞いているのが辛くなるやりとりだ。観劇後、すぐにまと

まった感想など言えるものかどうか、自分自身のこととをふり返ればわかることだ。粗筋が言えることと、劇がわかるということ、感想がすぐに言えることと、劇を楽しむということは、関連はしているが別の次元のことだ。

こんなことを繰り返していたら、劇嫌いの子どもが育ってしまわないかと、またまた心配になる。

観劇に即効性を求める見方は貧しい。カンフル剤ではないのだ。どちらかと言えばおやつ。主食ではないが、三度の食事を補完する大切な栄養源。何よりも、生活の愉しみ、あそびなのだ。子どもが自分から話し出すのを待つてほしい。

「子どもと一緒に来ていることを忘れてしまつて、自分が夢中になってしまいました」

こんな感想を聞くとほっとする。子ども席とおとな席を分けたかがあるというものだ。おとなにも一観客として人形劇を楽しんで欲しい。人形劇は観客の目にするものが、人間ではなく人形だという特



▲ ばばあちゃんのいそがしい夜

徴をもつ、演劇の一ジャンルだ。人形は、そのままでは命をもたないただの物体にすぎない。しかし、演技者の技と、観客のイメージによって、まるで生き物のように見えてくる世界だ。従って、五歳児は五年分の体験を総動員し、五十年生きたおとなは、五十年分の人生の重みをかけて人形劇を楽しめるはずだ。観客年齢に下限はあるが上限はない。

「あ、お父さんが笑ってる」

「へえ、お母さんも泣くんのだ」

親が「親」であると同時に、（先生が「先生」であると同時に）自分と同じ人間だったのだという発見は、子どもを元気にする。

## 親心2 おおきなお世話

人形劇を観ながら子どもたちは、いろんなことを口にする。騒々しいというのとは違う。心が揺れて、思わずポロリと言葉が落ちるといふところか。

私たちの人形劇は、片手遣いの人形で、衝立の中

で始まり、衝立の中で終わるといふ、どちらかと言えば素っ気ないものだ。観客に直接話しかけるだし物は少ない。観客参加型の劇に慣れた子どもの中には、とまどいもあるようだ。しかし、人形の動きをメインにしてドラマが進行するので、注意深く観ていないと、見のがしてしまうことに観客は気がつく。しだいに前のめりの構えになっていく。こうなるとしめたもの。人形つまり演技者の「息づかい」まで届いている手ごたえがある。観客のため息も聞こえる。つながっている！

子どもたちのつぶやきが聞こえる。

「あれ、誰」「どうしたの」「なんで」等々。

観てたらわかるよ。ふんふんふん——。演技者はワクワクする。人形劇は小説ではない。どちらかと言えば詩。観客の想像力をアテにして成り立っている。どんな見方だってありうるのだ。

そんなとき、保護者が傍にいたりやっかいなことになる場合がある。

「どうしたんだろう、この子は。観ていてわかんないのかしら」

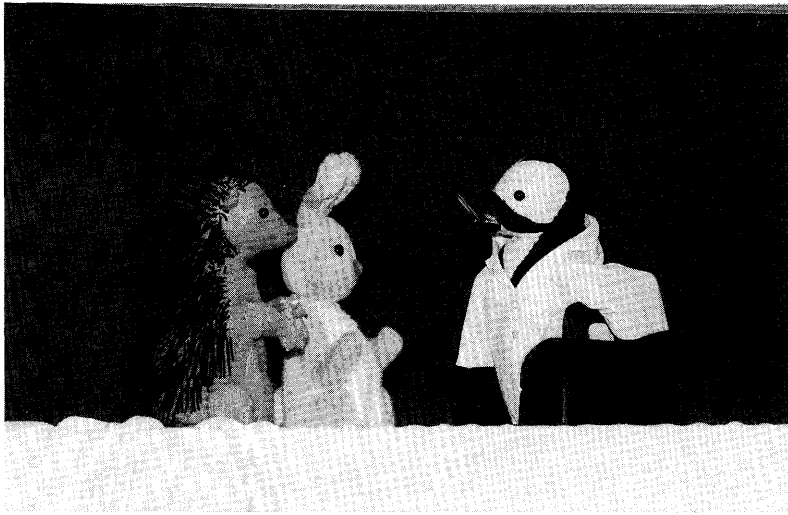
心配になるらしい。そして、困ったことにあわてて応えたりする。

「あれはネコよ」「皿が割れたの。アンタも観てたでしょ」等々。

しだいにエスカレートして、問われる前から説明してしまふ。しかし、ていねいに聞いていれば、子どもたちの「誰」「どうして」は他人への質問ではないことがわかる。自問自答。おとななら自分の内側でやっていること。強いて言えば感嘆符。よしんば質問だとしてもそこでは応えないで欲しい。

「誰かしらね」「どうしたんだろうね」

そのまま返して欲しい。これは不親切ではない。たかが人形劇。わからないこともあって良い。その場ではわからなくてもずっと後で、ああ、あれはそういうことだったのかと腑に落ちる。私たちもよくあることだ。幼い観客ならなおのこと、自分で感じ



▲ 「ハリネズミと雪の花」

て考えて、そして、発見する、この楽しみを奪ってはいけない。このように、今のところ残念ながら、親子席の分離は“好き勝手に観る自由の保障”という意味あいもある。

ちなみに幼稚園、保育園の場合は、四歳以上が前方、三歳以下は後方に座ってもらう。「ドラマ」を理解し、楽しめる年齢の子どもたちに一番良い席で観てもらいたいからだ。三歳以下の子どもたちは、人形の一つひとつの動きにそのつど反応し、手をふったり、声をかけたり、セリフをリフレインしたり、立ち上がったりたい。結果として「ドラマ」を楽しむ子どもたちにとって壁的な存在になる。後方に陣どれば、静止する野暮も避けられ、双方が観たい見方で、のびのびと楽しむことができる。年長児の、適格で豊かな反応が、舞台と客席との結びつきを強め、ドラマの進行を支え、観客集団を大きくリードしてくれる。子どもの「劇を楽しむ力」はおとなに優るとも劣らない。

## 主催者の責任

観客席をどう作るか、とりわけ、最大観客数Ⅱ定員をいくつにするかは大切な条件整備だ。観客年齢が下がれば下がるほど注意が払われなければならないと思うが、演目や対象年齢、上演時間ほどには話題にならないのはなぜだろうか。

演技者と観客はもちろん、観客同士の生きた交流もみんな観る人形劇の楽しさの大切な要素だ。ふともらしたため息や笑い声が伝播する。誰かのヤジに誰かが応える。茶々やひやかしへの無反応を含めて、自分のつぶやきが「受けとめられた」実感もてる集団の規模。「観客」としての自分の重さに気がつける集団の規模で、私たちの人形劇は観て欲しい。観客なしには演劇は成立しないのだから。

しかし、この定員の厳守は思いの他困難だ。チケット売りの場合は、収益との兼ね合いから、一席あたりの単価を下げるために観客数を増やしてしまうことがある。より多くの方々に手軽な料金で観せ

たいという主催者側の「善意」は、しばしば劇団側にとっては脅威となる。「届いているかしら」という不安の中で演じるよりも、多すぎる観客を分けて、ステージ数を増やした方が、演技者としては疲れない。

図書館や社会教育施設等の主催上演（買い上げであり、観客は無料）の場合も同様だ。税金を使っての取り組みだからということ、来る人拒まず。開演まで観客数を把握できないことが多い。会場の狭さを理由に、事前に整理券を配布したり、申し込み制をとるなど混乱を避ける努力をしているところも増えてはいる。しかし、当日の集客数で、企画そのものの成功・不成功を判断する体質もまだまだ残っていてやりきれない。

定員のワクを無理に広げて、粗筋はわかったが何も感じるところがなかったという観客を増やしてもしょうがない。それで生の人形劇なんてこんなものだと判断されるとしたら悔しい。二度と劇場には足



を運ばなくなるかも知れない。それよりも定員は定員として厳守し、みんなが「一番良い席」で堪能する。観のがした人は次の出合いに期待をかける——こうした取り組みの方が長い目で観るといい観客を育て、いい劇を育てることになるのだと、担当者はぜひ気がついてほしい。

### 劇場をあそぼう

劇場で観る演劇とテレビの決定的な違いは、わざわざかけて行くところにある。この「わざわざ」を、もっと楽しむためにも予約制、チケットの存在を見直したい。誰と行こうか、何を着ようか、観劇後どこでお茶を飲もうか……。チケットを手に入れたときから楽しみは始まっている。

幼稚園、保育園でもチケットを作り、「劇場ごっこ」として観劇会を展開したらどうだろう。そして、選んだ人もはっきりさせる。

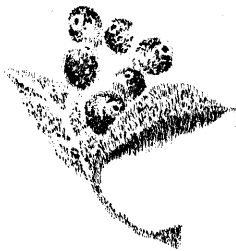
「今日の人形劇はA先生が選びました」

「へえ、A先生はこういう人形劇が好きなんだ」  
人形劇を観ることが、A先生をもっと深く知る機会にもなる。観劇は人と人をつなぐ。

若い観客がひとりひとりチケットを手に入場し、おもいおもいに席を占める様子を想像すると愉快だ。

一つの席に一人の人格。劇場は年齢に関わらず一観客をして尊重される場でありたい。

(人形劇団 ひぼぼたあむ)



# マレーシアの 子ども達をめぐって



藤長 かおる

はじめに

マレーシアは若い国である。英国の植民地支配、日本による占領時代を経て一九五七年に独立してから四十年にもならない。しかし、現在は、マハティール首相の主導の下にアセアン諸国の中でも発言力のある国となった。その経済発展にはめざましいものがあるが、マレー人、中国人、インド人を始めとして、独自の宗教と言語と生活様式を持ったいろいろな民族によって構成される多民族社会故の困

難さを持つ。「マレーシアの子ども達」といっても、どの民族に属するか、どの社会階層に属するかによって異なっており、その共通項を見い出すのは難しい。

筆者自身は、一九八八年から三年間、仕事でクアラルンプールに滞在し、そこで次代のマレーシアを担う若いマレー人の学生達に日本語を教える機会を得た。真面目で敬虔、国家建設に瞳を輝かせる十八、十九歳の彼らに接するなかで、考えさせられる

ことの多い日々だった。私が触れ合うことの多かった彼らがどんなところでどんな子ども時代を送ったのか、それと共にマレーシアの子ども達をとりまく状況についていくらかでも伝えることができたらと思う。

### コーランと子ども達

マレーシアの朝はとて早い。それは、また外が暗いうちに、モスクでの祈りの時間を告げる美しいアザンの響きで始まる。テレビの放送終了を告げるのもコーラン、イスラム教が国教（ただし信仰の自由は保障されている）のこの国では、毎日の生活とコーランは切っても切り離せない。金曜日はアッラーにモスクで祈りを捧げる特別な日、バジュ・マリュに身を包み腰にサロンを巻いた小さな男の子達も父親に手を引かれて、モスクへ向かう。マレー人の子ども達にとって、大人になっていくことは、イスラム教の世界観を身につけていくことだといって

も過言ではあるまい。子ども達は、お祈りをする両親の姿を日常的なものとして育つが、六歳頃になると、イスラム教の教義やコーランについて正式に勉強するために、放課後にコーラン塾に通うようになる。どうやって勉強するのかというと、アラビア語で書かれたコーランの読み方を勉強するのだという。意味はわかるのかと聞いたら、それは読めるようになってからの話で、初めは意味もよくわからぬままにコーランを何回も読み暗唱していくのだそうだ。「暑い日の午後などついうとうとしたくなるのが人情、そんな時は容赦なく先生の鞭が鳴る」というシーンが、マレーシアで人気の漫画家ラットの『カンボン・ボーイ』にユーモア一杯に描かれているが、マレー人の学生達が総じて忍耐強いのは、小さい時から訓練されたものなのであろう。

### カンボン・ボーイ、カンボン・ガール

カンボンとはマレーシア語で村という意味だが、

ふるさとと言った方が、その意味をよく伝えられるだろう。イスラムの断食明けのお祭りであるハリラヤ・プアサの休暇には、懐かしのカンボンに帰省する人で交通は大混雑となる。日本のお盆といっしょだ。筆者も機会があつて、近くには水田が広がり、ヤシの木陰にある小さなカンボンの家を訪れたことがある。高床式で、庭にはわとりが遊び、色鮮やかなバティックの洗濯物がはためいて、小さな子ども達が元氣よく遊んでいた。

前出のラットの漫画には、カンボンを舞台に成長していく子どもの姿が、筆者の体験を基にして生き生きと描かれている。木の枝から池に飛び込んだり、魚を取ったり、遊びの場は豊かである。現代では、テレビがあるのが当たり前になり、子ども向けの番組も放映されている。また、マレー語に訳された『ドラえもん』の漫画本が大変な人気だとも聞く。経済の発展と共にカンボンの生活も様変わりしてきているとはいえ、まだまだカンボン・ボーイの

時代は失われていないようだ。

マレーシアでは、日本に較べると兄弟が多く、五六人というのもそう珍しいことではない。弟や妹の面倒をみるのはお兄ちゃん、お姉ちゃんの役割のひとつだが、兄弟は近所の同年代の子ども達と共によき遊び相手である。男の子の遊びとしては、川遊び、魚つり、パチンコ等、女の子の遊びとしては日本でおままごとや人形遊びなどがあるそうだが、小さい頃は男の子、女の子ということなくいっしょに遊ぶことも多いらしい。その他の遊びとしては、コーラの瓶の蓋などを利用したおはしき、ビー玉遊び、あやとり、ゴムとび等、日本でも馴染みのあるものもある。「私は海辺で拾った貝を使って、大きい貝はお父さんとお母さん、小さい貝は赤ちゃんに見立てて、砂の上にお部屋を描いて遊んでいた」と、海辺の村ならではの遊びを紹介してくれた学生もいた。貝殻を使ってこんなふうにも遊べるのかと子どもの持つ創造性の豊かさに感心させられた。

カンボンにも、一年制の幼稚園のようなものがあり、小学校入学前にそこへ行く子どもも多いという。幼稚園では、絵を描いたり、唄を歌ったり、お遊戯をしたり、少し字を習ったり、これは日本とあまり変わらないのかもしれないが、残念なことに私はカンボンの幼稚園は見たことがないのであまり詳しいことはわからない。

## 家庭での躰け

マレー人の学生達は、大変行儀がよい。また、道徳心厚く、礼儀正しい。それは、イスラムの教えに基づくことが多いのであろうが、家庭での躰けもなかなか厳しいように思う。

小さい頃、両親にどういふことをよく言い聞かせられたかと聞いてみたことがある。「人に会ったら必ず挨拶をすること」「人に何かしてもらったらありがとうと言うこと」「大人の人が足をのばしている時など、その足をまたいではいけないということ」

等の答がかえってきた。誠に簡単なことだが、挨拶を交わすこと、感謝の意を表すことを教えるのは、豊かな人間関係を紡いでいく基本であろう、そう思って、とても温かい気持ちになった。

さて、躰けに関連して学生から教えてもらったマレーシアの諺を少し紹介してみたい。

・ぐずぐず食べていると象が来る

・最後まで食べ終わらないとごはんが泣く

これは、食事についての戒め。「象が本当に怖かった」という女子学生の言葉には笑ってしまったが、お米を大切に行っているところに稲作文化が思われる。

・枕の上に座るとお尻が腫れる

・腹這いになって足をあげて肘をつく、お母さんが早死にする

「腹這いになって足をあげて肘をつく」とは、だらしないかっこうでくつろぐことを意味する。どちらも行儀の悪いことを戒めたものであるが、マレーシアでは寝転んでポテトチップをつまみながらテレビ

を見るときはとんでもないことになる。

・女の子が木に登ると、その木は実がなくな  
る。

これは、女の子は女の子らしくと教えるためのものか。

諺なんて大人のでっちあげと言ってしまえばそれまでだが、理屈抜きのこんな教え方も、案外に残って、たまにはいいものだと思う。

### 働くお母さんの願い

今の若い日本の女性達に「結婚して子どもができたら仕事をやめますか」と質問したら、「続けたい」と答える人が多いのではないだろうか。マレーシアでも働く女性の姿を多く目にする。昨日まで大きなお腹をしていた大学のスタッフが、しばらく休んだかと思うと、机に可愛い赤ちゃんの写真をおいて颯爽と仕事をしていたりする。中流以上の家庭になれば、お手伝いさんを雇うことが比較的容易だか

ら、家のことをあまり心配せずに仕事に打ち込めるのだろう。また、高等教育を受けた女性は、自分が受けた教育の成果を社会に還元しなければもったいないという一種の使命感みたいなものも持っているようだ。

それでも、働くお母さんにとってまだ小さい自分の子どものことはいつも気になることには違いない。筆者が聞いた範囲では、子どもの面倒をみてもらうなら、集団保育の保育園に預けるよりは、両親、親戚などの身近な人にみてもらうか、誰か人を頼んで家に来てもらう方がいいという意見が多かった。理由はたくさんの子どもといっしょだときめ細かな対応が望めないからということらしい。また、血のつながりのある人の方がわがままも言えるし信頼がおけると考えるのだろう。自分で面倒がみられなくても、できるだけ、身近なところに子どもをおきたいということの現れかもしれない。

## クアラルンプールの幼稚園から

首都クアラルンプールは大都会。近代的なビルが続々と建っていく様は、マレーシアの経済発展を物語っているかのようだ。クアラルンプールを歩いていると、いろいろな顔をした人に出会う。マレー人、中国人、インド人、そしてマレーシア語でオラン・プティ（白い人）と呼ばれる人達、仕事で来ている日本人も多い。言葉も多様だ。街を歩いていてもテレビやラジオをつけても、いろいろな言語が耳に飛びこんで来るし、いろいろな文字で書かれた看板を見ながら歩くのも楽しい。服装もしくり、食べ物もしくりである。しかし、その楽しさもそういう社会で育っていく子どもにとっては複雑な意味を持つ。

幼稚園にもいろいろな種類があって、どの幼稚園に行くかによって、内容も随分違うらしい。クアラルンプール滞在中に地元の幼稚園にお子さんを通わせたことのある日本人の方にお話を伺ってみた。



▲ クアラルンプールの風景  
マスジット・ジャメ（イスラム教寺院）と近代的なビル

筆者がお話を伺った家庭では、中国人の園長が経営し、先生は主に中国人とマレー人という幼稚園にお子さんを通わせたそうだ。園児は、日本人、マレー人、中国人、インド人、その他白人の子ども達で、幼稚園があるのが高級住宅地の中心であるせいか、比較的豊かな家庭の子弟が多かったという。幼稚園での言葉は英語で、子どもは初めは何もわからなかったらしいが案外ヘッチャラだったという。ただし、四、五歳（日本でいう年少組）になるとマレー語の授業が始まり、家でもマレー語の「あいうえお」のようなものを唱えていたと話してくださいました。

現在、マレーシアの国語はマレー語、大きな通り沿いに「私達の言葉、マレーシア語を愛しましょう」というスローガンをよく目にした。複合民族国家のマレーシアでは、古くは、中国人学校、インド人学校、それに英国のミッション系のスクール等があり、そこでそれぞれの言語によってそれぞれの価

値観に基づいた教育がなされていた。マレー人の子弟のためには前出のコーラン塾のより伝統的なものとしてボンドックがあり、イスラム教育も含めて読み書きをも教える機関であった。その後マレー人の子弟のためにも、別に世俗的な教育機関としてのマレー語学校がつくられ、そちらへ通学する子どもも多くなる。そして独立以後、教育内容が整備統一され、それと同時に英語に代わってマレー語が国語として積極的に学校教育に導入されるようになる。現在の学校制度は六・三・二・二・三制で、公立の小学校は、マレー語学校（旧英語学校を含む）、中国語学校、インド系のタミル語学校に三分化され、小学校の六年間のみは、それぞれの言語を媒体とした教育が認められている（ただし、マレー語と英語は必修）。しかし、中学以降はマレー語媒体の教育に一本化され、下級中学校（三年）、上級中学校（二年）、及び二年間の予備教育課程を経て、大学へ進学するシステムになっており、高等教育でも英語に



代わってマレー語で授業が行われるようになってきた。

このような言語政策は国家の統一を目指す上では必須だが、現状はマレー語が操ればそれでこと足るほど簡単ではない。特に、非マレー人には複雑な問題を提起する。例えば教育熱心な中国系の両親であれば、民族の言葉としての中国語と生活のためのマレー語、そして国際語、エリートの言葉としての英語を習得することを子どもに求める。幼稚園の教育内容は比較的自由だが、しかし、こういうマレーシアの状況とは決して無縁ではありえない。そのため、幼稚園の頃から公文式のスキルトレーニングのようなことを積極的に行う幼稚園もあるようだ。

現在、政府のマレー人優遇の経済政策によって、植民地支配によって創り出された農村に住むマレー人、エステートに住むインド人、町で商業を営む中国人といった住み分け型の複合社会構造が、大きく変わろうとしている。

他の民族との融和と共存、そして「マレーシア」という名の共通の国家意識を創り出すことは、この国が歩んできた歴史を思うと、簡単なことではない。しかしながら、来るべく新しい時代に向けて、それぞれの民族が異質なものに対する理解と尊敬の念を持ちながら、多様であるが故に豊かな社会を目指してマレーシアが歩んでいってほしいと願わずにはいられない。そしてそのマレーシアの次の時代を担うのは、他ならぬ子ども達である。

執筆にあたっては、国際交流基金派遣専門家としてマラヤ大学予備教育課程において日本語の教鞭をとられていた上野栄三氏、在マレーシア日本大使館前一等書記官の山下勝男氏、国際交流基金日本語国際センター海外日本語教師長期研修生のロスリナさん、ロスワティさん、ハスパリナさんに貴重なお話を伺った。記して謝意を表したい。

(国際交流基金日本語国際センター)

# 編 集 後 記

今月から、「震災後の子どもたち」が始まります。阪神大震災から半年が経ちました。震災を体験した子どもたちはその後どうしているのでしょうか。現地で子どもたちのために心を尽くしている方々に何回かにわたって書いていただく中で、「想像力を働かせながら子どもと共にある者の役割を一緒に考えていきたい」（本誌P.15）と思っておりません。書いていただける方をご存じの方は編集部までお知らせください。

\*

「ここから先は子ども席」の永野さんのお話では、「ひばぼたあむ」のような人形劇団を含めた児童劇団

は、現在全国に百以上もあるそうです。そして、その中のいくつかの劇団が、今、大打撃を受けているそうです。それは、この四月から休みになった第四土曜日のために、小学校でまず削られたのが観劇だったこと、幼稚園の観劇を支えてきた、バザー開催が、最近の若いお母さんたちに敬遠されがちなことによるそうです。

私はこの話を聞きながら、日本で初めて幼稚園での人形芝居を上演したと言われる倉橋惣三のことを思い出していました。彼は、子どもたちの喜ぶ顔を見て、その初演の直後に、この人形芝居をすべての幼稚園に広めたいと思ったのです。それから七十年たった今、その喜ぶ顔が見られなくなっていくのだったら、それは、とても残念なことです。

(A)

## 幼児の教育

第九十四巻 第九号

(一九九五年九月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成七年九月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二一〇一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五二二一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一一四一九

☎〇三三五三九五―六六〇四

振替 〇〇一九〇―二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレー

ベル館にお願いいたします。

# おおきなしぜん ちいさなしぜん



こんちゅう

全10巻

- ①てんとうむし
- ②ちょう
- ③むしのたまご
- ④みつばち
- ⑤とんぼ
- ⑥ようちゅう
- ⑦おとしぶみ
- ⑧かまきり
- ⑨あしものいきもの
- ⑩かぶとむしのなかま

私たちをとりまく自然界には、どんな虫たちが生息しているのでしょうか。子どもたちの大好きな昆虫の仲間のそれぞれの特徴や生態、卵から成虫になるまでの過程をわかりやすく、イラストやカラー写真で紹介します。

A4変型判・各28頁・定価各1,000円（本体971円）・セット定価10,000円（本体9,710円）



かがく

全10巻

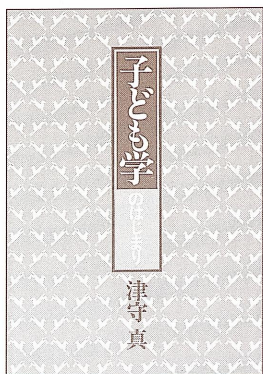
- ①あぶら
- ②たまご
- ③いし
- ④ふじさん
- ⑤ほね
- ⑥みず
- ⑦いろ
- ⑧かび
- ⑨かみ
- ⑩しゃぼんだま

私たちが日常、何気なく見たり、さわったりしているもの、これらのものたちには、どんな性質や特徴が備わり、私たち人間にとってどのように有用な役割を担っているのでしょうか。わかりやすく精緻なイラストやカラー写真で構成しました。

A4変型判・各28頁・定価各1,000円（本体971円）・セット定価10,000円（本体9,710円）

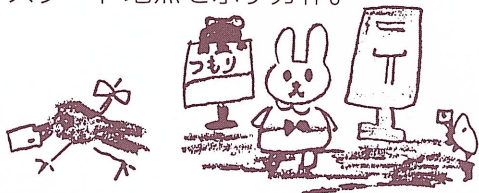
キンダーブックの  
**フレール館**

## 子ども学のはじまり



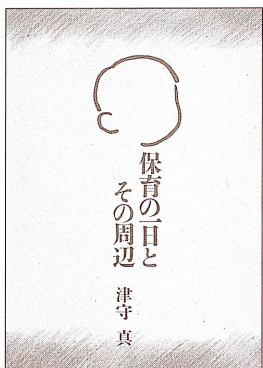
津守 真・著

子どもの行動の見方と研究法について、著者が10年来考えてきたことを論述し、保育の原点を示す。人間学的保育学のスタート地点を示す労作。



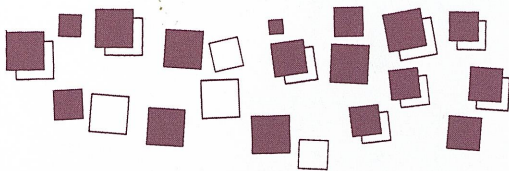
B 6 判・296頁・定価1,750円（本体1,699円）

## 保育の一日とその周辺



津守 真・著

保育実践の基本となる「一日」を中心に保育論を展開。保育の原点をわかりやすく述べ、豊富な実践と深い省察で、保育者へ新しい保育の指針を明示。



A 5 判・248頁・定価1,600円（本体1,553円）

キンダーブックの  
**フレーベル館**